

蟹ヶ谷古墳群の発掘調査成果

専修大学 高久健二

I. はじめに

多摩川右岸の下末吉台地縁辺は海岸段丘が形成されており、台地を開削するように矢上川や平瀬川が流れています。矢上川流域の台地上に蟹ヶ谷古墳群、日吉台古墳群、加瀬台古墳群が、平瀬川流域の台地上には久地・下作延古墳群、末長・久本古墳群などが分布しています。また、多摩川右岸低地の自然堤防上などにも二子・諏訪古墳群や上丸子・宮内古墳群などが分布しています（図1）。

蟹ヶ谷古墳群は川崎市高津区蟹ヶ谷に所在し、多摩川流域遺跡群研究会と川崎市市民ミュージアムが共同で「蟹ヶ谷古墳群発掘調査団」を結成し、2013～2016年に4次にわたる調査をおこない、その成果を報告書として刊行しました（以下、『前報告』とする）〔蟹ヶ谷古墳群発掘調査団2017〕。さらに、2018～2023年に4次にわたる追加調査をおこないました。本発表では、蟹ヶ谷古墳群に対するこれまでの調査成果を

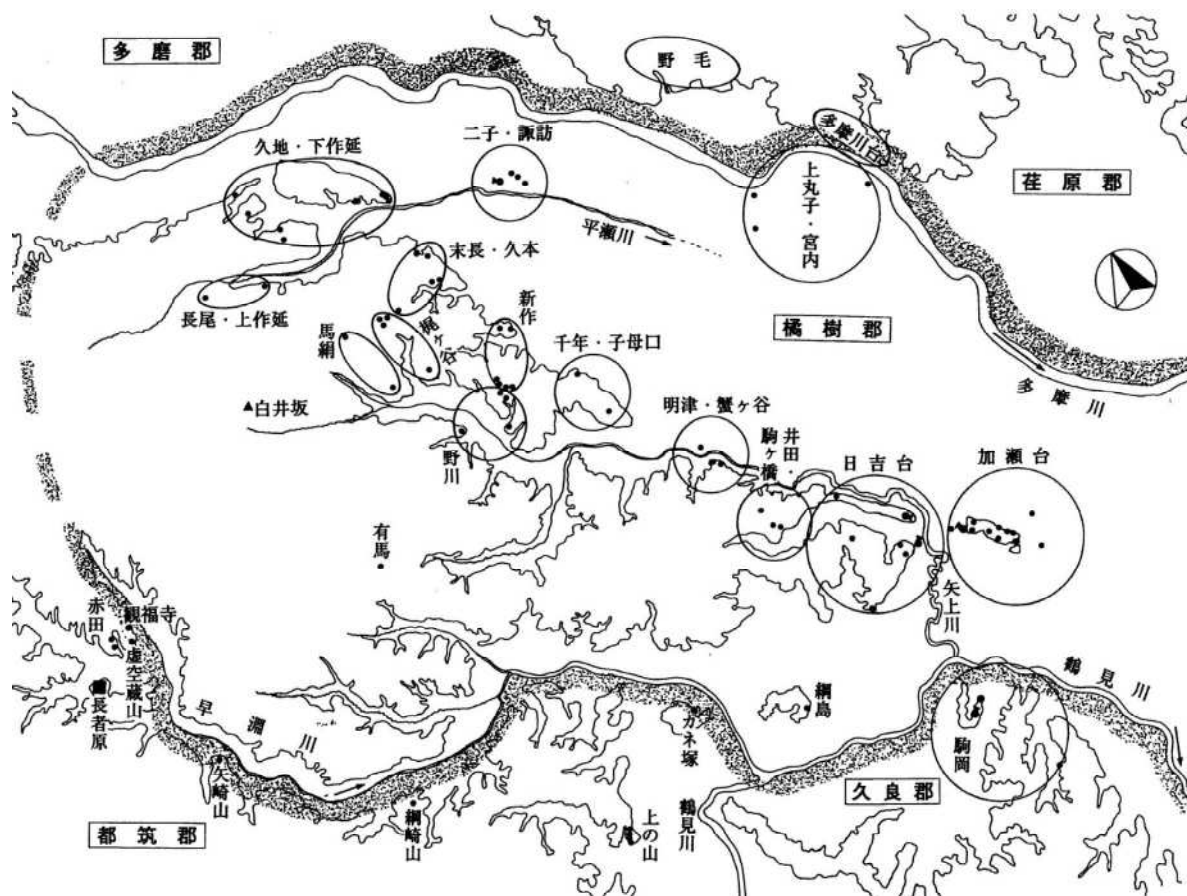


図1 古代橋樹郡の推定範囲と古墳群（浜田ほか1996）

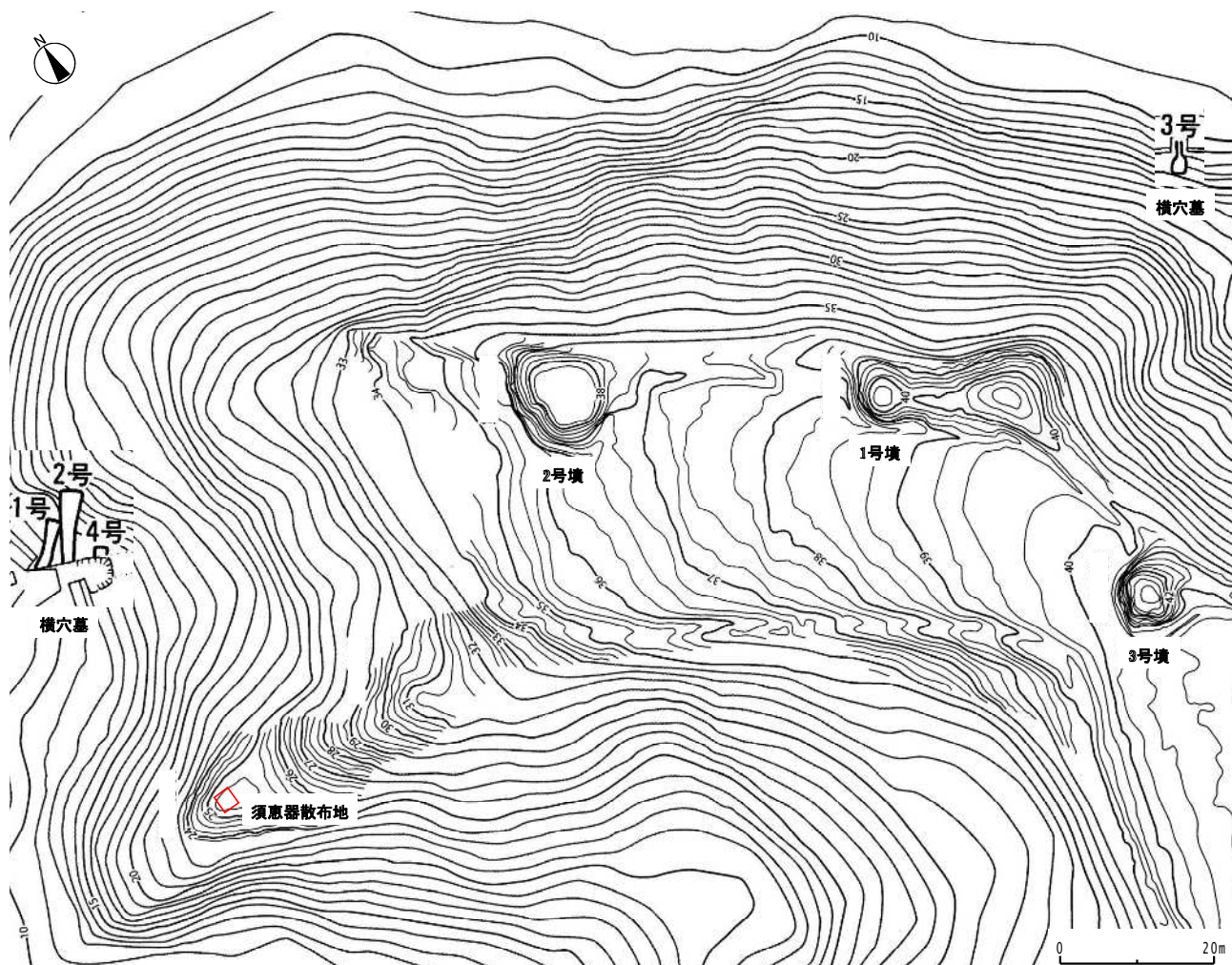


図2 蟹ヶ谷古墳群全体図（呉地ほか 1986、蟹ヶ谷古墳群発掘調査団 2017）

整理したうえで、周辺地域の古墳や集落遺跡との比較を通じて、蟹ヶ谷古墳群の歴史的意義について検討してみます。

Ⅱ．川崎市高津区蟹ヶ谷古墳群の発掘調査成果

蟹ヶ谷古墳群で確認された古墳時代の遺構は、1～3号墳と須恵器散布地であり（図2）、これらの調査成果をまとめると以下のとおりです。

（1）1号墳（図3）

1号墳は舌状台地の北東側縁辺部に立地し、『前報告』では前方部を南東方向に向けた前方後円墳であると報告されました。しかし、前方部と推定されていた部分では墳丘の盛土が確認できず、後円部と前方部の接続部分は幅4m以上の溝1によって分断されていることが確認されたため、1号墳を前方後円墳であるとする根拠がなくなりました。この溝1とは別に溝2が検出されており、東南部で北東側に屈曲するものと推定されます。当初はこの溝2を前方後円墳の周堀と推定していましたが、直線的であり、東南部ではローム層をV字形に深く掘り込んでいることからみて、古墳の周堀ではないと考えられます。4トレンチでは溝2の肩に落ち込むような状態で古墳時

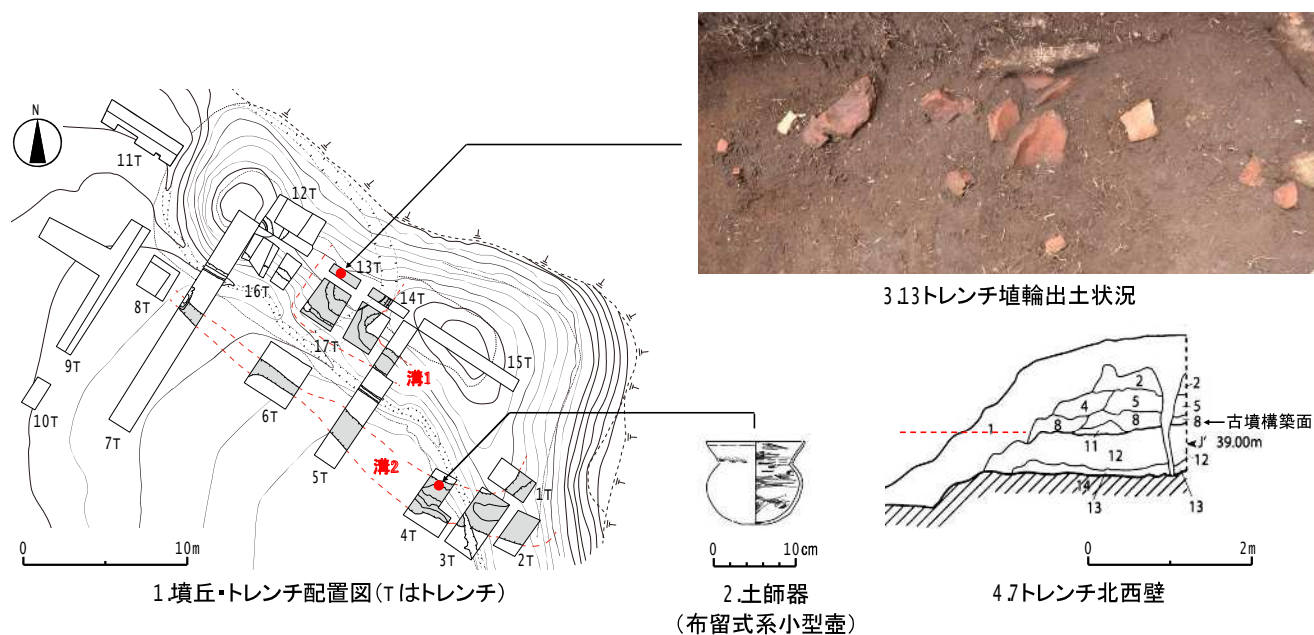


図3 蟹ヶ谷1号墳

代中期初頭の土師器が出土していますが、溝2がかなり埋まった後に流れ込んだものであり、溝2の時期を直接的に示すものではなく、1号墳の築造時期とも合いません。

1号墳で墳丘の盛土が確認されているのは、7・12・16トレンチのみです。7トレンチの2～11層が盛土に該当し、富士黒土と推定される黒褐色土層の上部に盛土がおこなわれており、この黒褐色土層が1号墳の構築面と推定されます。古墳構築面の標高は39.3mであり、地表の標高(38.8m)よりも高く、古墳築造以後に台地上面が大きく削平されたことを示しています。墳丘の盛土は上部が大きく削平されており、埋葬主体部もすでに失われたものと考えられますが、7トレンチからは凝灰岩片が出土しており、横穴式石室であった可能性もあります。

1号墳で特筆すべきは13トレンチにおいて埴輪片が集中的に出土した点です。おそらく溝1が墳丘の墳頂部近くまで掘り込まれた結果、墳頂部に樹立されていた埴輪が溝の埋没過程で流れ込んだものと考えられます。1号墳で出土・表採された埴輪片は円筒埴輪が主体を占め、形象埴輪は少数です。下総型埴輪が含まれていることから、古墳時代後期の6世紀後半に編年され、1号墳の築造時期を示すものと考えられます。

以上のように、墳丘の盛土が確認できたのは北西側の円丘部分のみであり、円墳であった可能性が高いといえます。古墳の周堀もすでに削平されているものと推定され、本来の墳丘規模は不明です。

(2) 2号墳(図4)

2号墳は1号墳の北西側約30m地点に位置し、墳丘南側の2トレンチと東南側の1トレンチで周堀の内側の立ち上がりを確認されたことから、『前報告』では直径約18mの円墳であると報告しました。その後、7トレンチを設定して、1トレンチとと

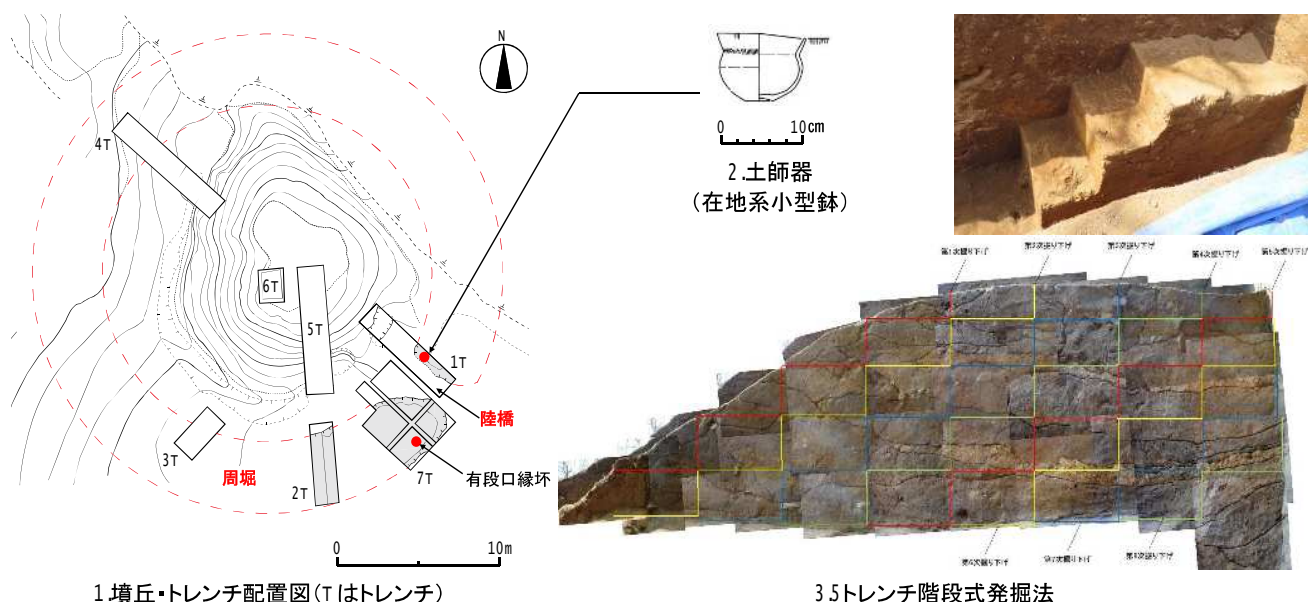


図4 蟹ヶ谷2号墳

もに確認調査をおこないました。その結果、墳丘の東南側で周堀が途切れる部分が確認され、幅約1.5mの陸橋が存在することが明らかとなりました。1・2・7トレンチで検出された周堀から墳丘の直径は約20m、周堀の幅は約4.5mと推定されます。

さらに、埋葬主体部と墳丘盛土の状況を確認するために5・6トレンチを設定して調査をおこないました。とくに5トレンチでは、盛土の状況をより詳細に調査するために、韓国などで用いられている階段発掘法を採用しました。調査の結果、土手状盛土や墳丘内堀込の状況など古墳構築に関する詳細なデータを得ることができ、予想以上の成果をあげることができました。また、古墳の構築面（標高36.5m）を検出することができ、その下に弥生時代後期の住居跡が存在することも明らかになりました。残念ながら埋葬主体部の痕跡は発見できませんでした。おそらく埋葬主体部は横穴式石室ではなく、竪穴系の埋葬主体部であったため、墳丘上部が削平された際に失われたものと考えられます。

1トレンチで2号墳の築造時期を示す土師器が出土しています。この土器は陸橋部分から周堀に落ち込んだ状態で周堀の最初の埋土中から出土しており、その形態から古墳時代中期前半の和泉式土器前半（5世紀前半）に属するものと判断されます。また、7トレンチの埋土中からは6世紀後半の有段口縁坏が出土しており、2号墳の下限年代を示しています。したがって、2号墳の築造時期は5世紀前半にさかのぼる可能性が高く、この年代は竪穴系の埋葬主体部であった可能性が高い点や埴輪がともなわない点とも矛盾しません。蟹ヶ谷古墳群造営の契機になった古墳である可能性が高いといえます。

(3) 3号墳（図5）

3号墳は1号墳の南側約30m地点に位置し、墳丘南側に設定した1トレンチと北側

に設定した2トレンチではそれぞれ周堀の内側と外側の立ち上がり部分が検出されています。これから本来の墳丘の直径は約17.5mと推定され、墳丘が大きく削平されており、現在の墳丘も本来の墳丘の中心部分からずれていることがわかります。

3号墳にともなう土器や埴輪は出土していないことから、築造時期は不明です。埋葬主体部の形態も不明であり、墳丘の削平状況からみると、すでに失われている可能性が高いといえます。

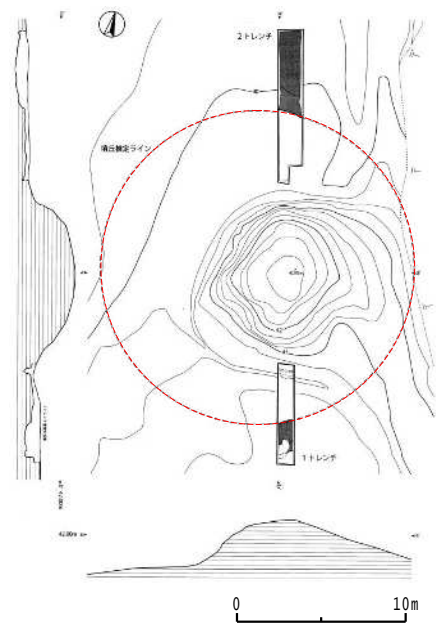


図5 蟹ヶ谷3号墳

(4) 須恵器散布地（祭祀遺構）（図6）

蟹ヶ谷古墳群が立地する舌状台地の西側突端部（標高約25m）に位置しており、谷部をのぞむことができる。『前報告』では4号墳として報告しましたが、その後の調査で墳丘の盛土は確認されず、古墳であるという積極的な証拠は見つかりませんでした。しかし、表土直下から須恵器の大甕の破片が多数出土しており、古墳時代の遺構があったことは間違いありません。大甕の破片は接合するものが多数あり、本来は1個体であったものを意図的に破砕したのではないかと推定されます。これと類似した遺跡が横浜市市ケ尾横穴墓群で確認されています。市ケ尾横穴墓群は谷部の斜面に20基の横穴墓が構築されており、この谷をのぞむ丘陵尾根上に車塚という円形の低墳丘をもつ遺跡があります。発掘調査の結果、須恵器の大甕片が破砕された状態で出土しましたが、埋葬施設等は発見されませんでした。これらのことから車塚は古墳ではなく、市ケ尾横穴墓群と関連する祭祀遺構であると推定されています〔大塚・小林1982〕。蟹ヶ谷古墳群も台地の斜面には7世紀代の横穴墓が存在し、須恵器散布地はこれらをのぞむ高台に立地していることから、車塚と同様に横穴墓と関連する祭祀遺構ではないかと推定されます。

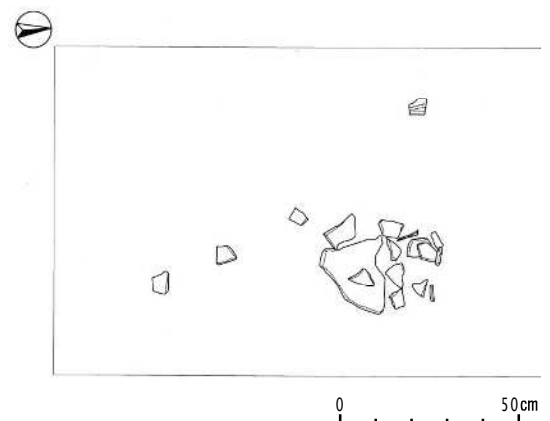


図6 須恵器散布地

Ⅲ. 橘樹地域の古墳文化と蟹ヶ谷古墳群

蟹ヶ谷古墳群が位置する矢上川流域では、古墳時代前期から前方後円墳の造営がはじまっています。加瀬白山古墳は墳丘長87mの前方後円墳であり、後円部で木炭槨1基と粘土槨2基が、前方部で粘土槨1基が発見されています〔柴田・森1953〕。このうち最初に築造された後円部の木炭槨からは椿井大塚山古墳と同範鏡である三角縁神獸鏡が出土しており、4世紀代におけるヤマト王権との密接な関係がみられます。ま

た、同じ木炭槨から出土している板状鉄斧は朝鮮半島からの舶載品です。加瀬白山古墳の北西側の矢上台に位置する観音松古墳も墳丘長 100m の前方後円墳であり、後円部で中央粘土槨と南粘土槨が発見されており、前者からは内行花文鏡、碧玉紡錘車、銅鏃などが出土していることから、古墳時代前期に該当します〔安藤 2009・2015〕。

次の古墳時代中期に該当する古墳としては、矢上川流域の加瀬台 4 号墳（了源寺古墳）、加瀬台 8 号墳、日吉矢上古墳、西福寺古墳、平瀬川流域の津田山 2 号墳、末長向台古墳群などがあります。加瀬台 4 号墳は石室から浮彫式獣帯鏡、盤龍鏡とともに鉄刀、鉄剣、鉄斧などが出土しました〔東京国立博物館 1986〕。土器と埴輪片も出土していますが詳細は不明です。加瀬台 8 号墳は一辺 24m の方墳であり、埋葬主体部は残っておらず、埴輪も出土しませんでした。周堀内から築造時期を示す土師器の一括遺物が出土しています〔浜田ほか 1996〕。この土師器は和泉式土器後半に属するものであり、蟹ヶ谷 2 号墳に後続するものと考えられます。日吉矢上古墳は直径 24m の円墳であり、粘土床木棺から鼉龍鏡、玉類、竹櫛、鉄剣、鉄鏃などが出土し、墳丘からは埴輪片が出土しています〔柴田・保坂 1943〕。埴輪がともなうことから蟹ヶ谷 2 号墳よりも築造時期は下ると考えられますが、墳丘規模は類似しており、蟹ヶ谷 2 号墳の埋葬主体部を推定する際の参考となります。西福寺古墳は東西 31m、南北 28m の円墳であり、埋葬主体部は不明ですが、周堀から多数の埴輪が出土しています。在地の白井坂埴輪窯産の埴輪であり、5 世紀後半に位置づけられています〔浜田 1992、浜田ほか 2009〕。津田山 2 号墳は直径 29m の円墳であり、幅約 8m の周堀が確認されています〔伊東 1965〕。埴輪は出土しませんでした。墳丘盛土上面から和泉式土器後半の土師器高杯が出土しています。末長向台古墳群は 5 世紀後半～6 世紀後半に築造された 7 基の古墳が調査されています。最古の 3 号墳は 5 世紀後半～6 世紀初頭に築造された直径 18.6m の円墳であり、蟹ヶ谷 2 号墳と同様に陸橋付きの周堀がめぐっています〔大坪ほか 2011〕。したがって、蟹ヶ谷 2 号墳は当該地域における中期古墳のなかでは初期段階に位置づけられ、築造年代は多摩川左岸の野毛大塚古墳（帆立貝形前方後円墳：墳丘長 83m）とほぼ同時期の 5 世紀前半と考えられます〔野毛大塚古墳調査会 1999〕。また、周堀に陸橋をもつことから、帆立貝形前方後円墳に次ぐランクの被葬者が想定されます。

蟹ヶ谷古墳群の南側に隣接して縄文時代～古墳時代の集落遺跡である神庭遺跡があります〔関ほか 1973・1974〕。神庭遺跡における古墳時代の住居跡は前期（五領式期）、中期（和泉式期）、後期（鬼高式期）のものがみられますが、前期の集落が消滅した後に空白期を置いて中期の和泉式期後半になって集落が復活し、後期の集落へと続いていきます。したがって、中期集落の形成に先立って蟹ヶ谷 2 号墳が築造されており、古墳群の造営が集落形成の契機になった可能性もあります。

6 世紀前半は『日本書紀』安閑天皇元年条に記された武蔵国造の乱と橘花ミヤケの設置時期に該当しますが、古墳時代後期になると矢上川流域の古墳は減少してしまい

ます。一方、平瀬川流域や多摩川右岸低地では稲荷塚古墳、日向古墳、久本山古墳、二子塚古墳、諏訪天神塚古墳、塚越古墳など、埴輪が出土する後期古墳が多く存在しています。稲荷塚古墳は6世紀後半に築造された直径20mの円墳であり、人物形埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪と円筒埴輪が出土しています〔浜田1992〕。日向古墳は直径30mの円墳であり、人物形埴輪と円筒埴輪が出土しています〔伊東・大坪1979〕。稲荷塚古墳と同時期の6世紀後半と推定され、円墳の周囲には横穴墓群が構築されています。諏訪天神塚古墳も6世紀後半に築造された直径16.4m以上の円墳であり、埋葬主体部は泥岩を用いた横穴式石室で、須恵器、土師器、円筒埴輪、形象埴輪が出土しています〔浜田・新井2011〕。塚越古墳は6世紀中葉～後半に築造された直径約24mの円墳であり、周堀には陸橋が付けられています。埋葬主体部は磯石などを用いた横穴式石室であり、当該地域における導入期の横穴式石室として注目されます〔新井悟2022〕。埴輪は円筒埴輪と人物形埴輪、家形埴輪、大刀形埴輪、馬形埴輪などの形象埴輪が出土しています。蟹ヶ谷1号墳は矢上川流域の埴輪をもつ後期古墳として重要であり、埴輪を樹立する最終段階である6世紀後半の古墳として位置づけられます。埋葬主体部は不明ですが、諏訪天神塚古墳や塚越古墳と同様に横穴式石室であった可能性もあります。

7世紀になると、馬絹古墳のように円墳で埋葬主体部に泥岩を用いた切石切組積三室構造の複室胴張横穴式石室を採用する首長墳が造営されるとともに〔樋口ほか1973、竹石ほか1994〕、多くの横穴墓群が造営されるようになります。蟹ヶ谷古墳群では1号墳ののちは墳丘をもつ古墳は造営されなくなり、かわって丘陵の斜面に横穴墓群が造営されます〔呉地ほか1986〕。蟹ヶ谷古墳群で発見された須恵器散布地はこの時期の祭祀遺構と推定されます。その後、当該地域の古墳文化は終焉を迎え、橘樹郡衙・影向寺が造営される律令社会へとシフトしていきます。

IV. おわりに

蟹ヶ谷古墳群の発掘調査の結果、1号墳と2号墳の築造年代を明らかにすることができ、とくに2号墳は古墳時代中期までさかのぼることがわかりました。また、2号墳の墳丘盛土の調査においても大きな成果を得ることができました。以上の調査結果をまとめて今年度中に最終報告書を刊行する予定であり、本発表はその中間報告となります。多摩川流域遺跡群研究会では今後も発掘調査を通じて、川崎市の古代史を解明していく予定ですので、ご理解とご協力を賜れば幸いです。

【引用・参考文献】

- 新井悟 2022 「川崎市幸区塚越古墳の調査成果～橘花屯倉との関係性～」『古墳時代後期から終末期にかけての様相を探る』、かながわ考古学財団
- 安藤広道 2009 「観音松古墳の研究 1－墳丘及び墳丘外施設の復元－」『史学』第 78 巻第 4 号
- 安藤広道 2015 「観音松古墳の研究 2－新発見の写真と図面からみた墳丘と主体部の形態と構造－」『史学』第 85 巻第 1-3 号
- 伊東秀吉 1965 「川崎市津田山古墳」『川崎市文化財調査集録』第 1 集、川崎市教育委員会
- 伊東秀吉・大坪宣雄 1979 「川崎市下作延日向横穴墓群の調査」『第 3 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』、第三回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会
- 大塚初重・小林三郎 1982 「市カ尾車塚の調査」『横浜市史 資料編 21』、横浜市
- 大坪宣雄ほか 2011 『末長向台遺跡第 4 地点 末長向台古墳群発掘調査報告書』、吾妻考古学研究所
- 蟹ヶ谷古墳群発掘調査団 2017 『蟹ヶ谷古墳群』川崎市市民ミュージアム考古学叢書 8、川崎市市民ミュージアム・蟹ヶ谷古墳群発掘調査団
- 呉地英夫ほか 1986 『蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査報告書』、玉川文化財研究所
- 柴田常恵・保坂三郎 1943 『日吉矢上古墳』慶應義塾大学史学科研究報告、三田史学会
- 柴田常恵・森貞次郎 1953 『日吉加瀬古墳』考古学・民族学叢刊第二冊、三田史学会
- 関俊彦ほか 1973 『東神庭遺跡－第 1 次調査概要－』、東出版
- 関俊彦ほか 1974 『神庭遺跡－第 2 次調査概要－』、東出版
- 竹石健二ほか 1994 「発掘調査」『神奈川県指定史跡馬絹古墳保存整備・活用事業報告書』、川崎市教育委員会
- 東京国立博物館 1986 『東京国立博物館図録 古墳遺物篇（関東Ⅲ）』、便利堂
- 野毛大塚古墳調査会 1999 『野毛大塚古墳』、世田谷区教育委員会
- 浜田晋介 1992 「川崎の埴輪」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 4 集、川崎市市民ミュージアム
- 浜田晋介ほか 1996 『加瀬台古墳群の研究 I－加瀬台 8 号墳の発掘調査報告書－』考古学叢書 2、川崎市市民ミュージアム
- 浜田晋介ほか 2009 『白井坂埴輪窯跡』考古学叢書 6、川崎市市民ミュージアム
- 浜田晋介・新井悟 2011 『諏訪天神塚古墳－多摩川低地の遺跡群研究－』考古学叢書 7、川崎市市民ミュージアム
- 坂野和信 2007 『古墳時代の土器と社会構造』、雄山閣
- 樋口清之ほか 1973 「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財調査集録』第 8 集、川崎市教育委員会
- 渡辺昭一ほか 2008 『末長向台遺跡第 3 地点 末長向台古墳群発掘調査報告書』、吾妻考古学研究所